

マレー語・インドネシア語教育の実践 A P U方式の確立へむけて

井 口 由 布

要旨

本論文は、マレー語・インドネシア語という日本の大学における外国語教育ではあまりポピュラーではない言語の教育実践から、日本における外国語教育の新しいありかたを模索する試みである。この教育実践は、立命館アジア太平洋大学（A P U）の特徴的な大学教育といっしょになってはじめて可能になるものである。以下において、まず日本の大学におけるマレー語・インドネシア語の教育の状況を概観する。つぎに立命館アジア太平洋大学でのわたしの教育実践についておおまかに述べ、この大学の特色を利用した特別プロジェクトについて実施の状況を述べる。

キーワード：マレー語、マレーシア語、インドネシア語、大学教育、外国語教育

1. 日本の大学におけるマレー語・インドネシア語教育の現状

日本におけるマレー語・インドネシア語教育の現状について述べる前に、用語について整理をしたい。「マレー語」「マレーシア語」「インドネシア語」といった名称は何をさしているのか、また違いは何かということである。マレー語は、英語のMalayをカタカナで表記したものであるといえよう。英語のMalayは、現地の言葉でいうMelayuがもとになっている。マレー語はもともとスマトラ島東岸地域やマレー半島を起源とした言葉であるが、交易の時代にリンガ・フランカとしてマレー諸島地域で広く使用されていた。そのことから、国民国家として独立するさいに、インドネシアでは中心地ジャワのジャワ語ではなく、マレー語を国語として採用することとなった。そのさいにあたえられた名称がインドネシア語である¹。同様にマレーシア（マラヤ）においてもマレー語が国語として採用された。ただし、マレーシアではマレーシア語だけでなくマレー語という名称も引き続き利用されている。マレー語という名称はブルネイの公用語、またシンガポールの国語としても使われている²。

インドネシア語もマレーシア語もマレー語という同じ起源をもつのであるから、二つの国家の国語が似ているのは想像に難くない。マレーシア語話者とインドネシア語話者は、ニュアンスの違いなどはあってもそれぞれの言語で意思を疎通することは可能である。とはいえ、別々の国語政策によって整備をされて発展した結果、文法、語彙、つづりなどでさまざまな相違がみえる³。

現在の日本において教授されている科目名ではインドネシア語が圧倒的に多い。しかしながら、マレー語・インドネシア語（立命館アジア太平洋大学）やインドネシア語・マレー語（摂南大学）などのように、マレー語とインドネシア語を併記させる場合もある。また、以下で示す東京外国語大学における学科名の変遷にもみられるように、マレー語やインドネシア語といった名称は、所与ではなく歴史的に意味内容を変えて変遷するものである。そこで、今回の論文では、インドネシア語だけでなくマレーシア語、マレー語をもふくめて考察の対象とすることにした。

日本において最初にマレー語の教育を行ったのは、東京外国語大学の前身である東京外国語学校である⁴。1911年に馬來語学科が設置されている。1944年に東京外事専門学校として改称するにともない、馬來語学科はマライ科となり、支那、蒙古、タイ、インド、ビルマ、フィリピン、イスパニア、

ポルトガルの9科とともに第一部を構成することとなった。インドネシア共和国の独立宣言後の1946年8月16日には、マライ科はインドネシア科へと改称された。1949年に国立学校設置法の施行により東京外国語大学が設置されたときはインドネシア科、その後1964年に科が語学科へと改称されてインドネシア語学科となる。1984年にはインドネシア語学科はインドネシア・マレーシア語学科へと改称され、インドネシア語専攻とマレーシア語専攻の二つの専攻から成立することになる。1992年にインドネシア・マレーシア語学科はインドシナ語学科と合同し、東南アジア語学科となる。インドネシア語、マレーシア語専攻はこの東南アジア語学科のもとに設置されている。

現在、日本ではいくつかの大学においてインドネシア語、マレー語、マレーシア語の授業が開講されている。ただし前にも述べたように多くはインドネシア語という科目名であり、マレーシア語という科目名は東京外国語大学の東南アジア課程マレーシア語専攻においてのみ開講されている。

これらの言語についての学科など専攻のある大学は以下である⁵。東京外国語大学外国語学部東南アジア課程インドネシア語専攻ならびにマレーシア語専攻、大阪外国語大学外国語学部インドネシア語専攻⁶、京都産業大学外国語学部言語学科インドネシア語専修、天理大学国際文化学部アジア学科インドネシア語コースである。専任教員のいる大学は、上記の専攻科のある大学にくわえて、立命館アジア太平洋大学、九州国際大学、拓殖大学、亜細亜大学、南山大学である。ほかに専修大学、新潟大学、中央大学、桜美林大学、早稲田大学オープン教育センター、日本大学においてインドネシア語の科目が開講されている⁷。

2. 立命館アジア太平洋大学におけるマレー語・インドネシア語授業実践の概略

以下では立命館アジア太平洋大学におけるわたし自身のマレー語・インドネシア語にかんする授業の実践を紹介する。

立命館アジア太平洋大学は2000年に大分県別府市十文字原に開校した。マレー語・インドネシア語は中国語、韓国語、スペイン語、タイ語、ベトナム語とならんでアジア太平洋言語のひとつとして位置づけられている。授業はマレー語・インドネシア語、マレー語・インドネシア語、マレー語・インドネシア語、マレー語・インドネシア語の4種類である。マレー語・インドネシア語からは

4単位の科目で、95分の授業が週4回、15週間行われる。マレー語・インドネシア語は2単位の科目で、週2回、15週間行われる。授業規模は少人数で、1クラス5人から開講が可能で、定員の最大は25人である。

立命館アジア太平洋大学は、学生数のほぼ半数を日本以外の78の国と地域から受け入れているたいへん特徴的な大学であり、在籍するインドネシア、マレーシアからの学生も100人を有に越えている。つまり、この大学は、教室で学んだマレー語・インドネシア語をそのままキャンパスですぐに試すことができる、とてもユニークな環境を備えている。そこでわたしは着任の2005年度から、文法解説や読解だけではない授業をめざしてきた。

文法と読解

基本的な文法事項は、マレー語・インドネシア語およびマレー語・インドネシア語において終了させることにしている。文法事項をつぎの13項目に分け、最初の7項目をにおいて、あとの6項目をにおいて網羅する⁸。発音と表記、名詞の文、動詞の文、形容詞の文、疑問詞、助動詞、Me動詞、いろいろな単文、接続詞、受動態、Yang、いろいろな接辞、比較表現。の疑問詞のうちmanaの項目では場所にかかわる表現を、kapanの項目では時にかんする表現を学ぶ。また、berapaの項目では時間表現を学ぶ。では11種類、計15の助動詞を学ぶ⁹。

のいろいろな接辞では、接辞全体の説明を行いつつ、接頭辞ter、接頭辞se、接辞ke-an、接辞me-kan、接辞me-iに重点をおく。

マレー語・インドネシア語教育の実践
APU方式の確立へむけて

と における文法事項は、おもにインドネシア語を中心に行っている。その理由は、キャンパス内にインドネシア出身の学生が多いこと、インドネシア語のほうが話者の人口が多いこと、日本の他の大学においてもインドネシア語を教える機会が多いことなどがあげられる。そこでマレー語にかんしては と のあいだは指摘にとどめるだけにし、のちに述べる の読解でマレー語の資料を利用するさいに、つづり、語彙、文法のちがいを説明するようにしている。

マレー語・インドネシア語 では、読解はほとんど行っていない。読解を開始するのはおもにマレー語・インドネシア語 からである。森山幹弘・柏村彰夫の『教科書インドネシア語』の長文のみを利用して における文法の復習をかねて読解をおこなう。

マレー語・インドネシア語 と では、読解資料を読みすすめるなかでそのつど文法事項の解説を行っている。基本文法の項目のなかではあつかいきれなかったさまざまな接続詞や、pun、pula、jugaの用法、ke-anなどの接辞の表現を文章の中で勉強する。

マレー語・インドネシア語 と における読解資料としてもっともよく利用するのは新聞記事である。インドネシアの内政にかんする記事などについては、予備知識の欠如が読解の妨げになるので、日本にかんする記事や国際的な問題を多く取りあげるようにしている。これまで読んだのは、小泉首相（当時）の靖国参拝にかんする記事、安倍首相の誕生にかんする記事、スマトラ島沖地震やジョグジャカルタの地震についての記事である。マレー語・インドネシア語 から、同じトピックにかんするマレーシアの新聞記事も同時に読ませ、表現のちがいを具体的に学ぶような工夫を行っている。新聞記事を読むことで、さまざまな事件がインドネシアやマレーシアにおいてどのようにあつかわれているのかを知ることができ、たんなる語学学習を越えて地域理解の一助になると考えられる。

マレー語・インドネシア語 では、漫画や若者雑誌なども読解に利用している。毎年かならずとりあげるのはインドネシアとマレーシア両国でそれぞれ翻訳されている『ドラえもん』である。日本の学生たちにとってすでに親しんだ物語あるために読解がしやすく、さらにインドネシアとマレーシアにおける会話表現の違いが学べる。

作文

作文にかんしては、あとで述べる特別プロジェクトとかかわりがある。もちろん新しい文法項目などがでてきたときには、そのつど作文を課している。しかしながら、文法の学習に付随する作文以外に、授業ではさまざまな作文を行っている。たとえば、マレー語・インドネシア語 では1人の持ち時間が5分のプレゼンテーションを授業の最終期に行う。そこで、 では最後のプレゼンテーションへいたるまでに、異なるテーマで二回ほど簡単なプレゼンテーションを行う。4人ほどのグループを単位にして、ダブルスペースでA4一枚から二枚程度の下書きを作成し、そのつど口頭での報告を行う。

一度目のトピックはインドネシアについてである。2007年春学期においては、インドネシア全体について一般的に説明するもの、歴史や地理について解説するものなどがあつた。二度目は、キャンパスにおけるフィールド調査をもとにやはりA4一枚から2枚ほどの下書きを作成し、プレゼンテーションを行う。

マレー語・インドネシア語 では1人の持ち時間が15分のプレゼンテーションのための、プレゼンテーション用の下書きを作文するという作業を行っている。

リスニング

わたしの授業ではカセットやCDを使ったリスニング学習は行っていない。リスニングは、キャンパスにおいて実践的にすることを奨励している。もちろん、自発的に行ってもらうだけでなく、授業をとおしていくつかの道具立てを用意している。一つはキャンパスの国際学生に教室へ訪れてもらうことで、実践的なリスニングの学習を行っている。もう一つは特別プロジェクトにおけるキャンパス内でのフィールド調査などをとおしての、実践的なリスニング学習である。

言語学習というのはそもそも総合的なものである。検定試験等においては、カセットやCDから一方的に流れる音声を確実にキャッチするということが必要であるが、実際のコミュニケーションの場では、確実性よりもむしろ、聞き取れなかったときに聞き返すことや、うまく理解できなかったときには、どこが理解できなかったかを相手に伝えるということが必要になる。立命館アジア太平洋大学では実践的なコミュニケーションをするチャンスが無数に転がっている。その意味でリスニングとスピーキングをべつべつにわけようという項目立ては不要であるといえるかもしれない。

会話

会話の学習で取り入れていることは大きくつぎの二つである。一つ目は会話のフレーズを繰り返し練習して暗記すること、またそのフレーズを使った簡単な応用である。二つ目はトピックを決めて行う会話である。

一つ目にかんして、わたしはインドネシア出身の学生の力を借りてフレーズ集をつくっている。前にも述べたように立命館アジア太平洋大学には多くのインドネシア・マレーシア出身学生がいるので、海外旅行のための会話よりもむしろ、キャンパスで日常使える会話のフレーズづくりをめざしている。以下はその一部である。

A : Pesta hari Jumat jam berapa?

B : Jam 7 kayaknya.

A : Di mana?

B : Di rumah Bu guru. Jangan telat!

A : 土曜日のパーティは何時から？

B : たぶん7時だよ。

A : どこで？

B : 先生の家。遅れないようにね。

A : Aduh. Lapar nih.

B : Mau makan?

A : Ya. Tapi kamu yang bayar!

B : OK deh.

A : ああ、おなか空いたなあ。

B : 食べたい？

A : うん。でも君がごちそうしてね。

B : わかったよ。

これらの簡単な会話のセットの習得はマレー語・インドネシア語が中心である。だいたい一週間に一セットの割合で会話のセットを覚える。授業開始10分のあいだに異なるパートナー10人ほどと練習をし、口から自然にフレーズがでてくるまでくりかえす。

二つ目の、トピックを決めて行う会話は、ただ会話をするというのではなく、一定の約束事にそって行うものである。日本人の多くは、質問をされてもただその質問に答えるだけで、会話がなかなか続かない。たとえば「昨日はどこへ行きましたか？」と尋ねられれば「昨日は大学へ行きました」と答えるだけである。そこで、一定の約束事をつくることによって、会話のパターンを身につけ、質問

マレー語・インドネシア語教育の実践
A P U方式の確立へむけて

と回答で終わらずに会話を続ける方法を身につける。その方法はつぎのようである。質問者が質問をする。答える方は、答えとそれに関連する情報を足して質問者にかえす。質問者はその情報に関連した質問を行う。回答する側は、同様に答えとまたそれに関連する情報を一つ質問者にかえす。図解すると以下のようなになる。

質問者：質問
回答者：回答 + 情報
質問者：質問
回答者：回答 + 情報

このような会話パターンの練習はマレー語・インドネシア語 から開始する。トピックは学習した文法事項などとあわせて行うと効果的である。たとえば、接続詞の waktu (~のとき) を学んだあときには、「小さいときのこと」をトピックにするなどである。

A : Waktu Anda kecil, Anda tinggal di mana?
B : Saya tinggal di Yokohama. Di hadapan rumah saya ada laut.
A : Anda berenang di sana?
B : Tidak. Saya tidak bisa berenang. Tapi saya berselancar di sana.

A : 小さいときどこに住んでいましたか？
B : わたしは鎌倉に住んでいました。 家の前に海がありました。
A : 海で泳ぎましたか？
B : いいえ。わたしは泳げないんです。 でもサーフィンをしましたよ。

下線部分が答えに足された新しい情報である。この情報が会話をふくらませる手がかりとなるのである。

また、上記の会話パターンはさまざまな応用をすることができる。たとえば回答者が二回目の答えのあとに情報ではなく、質問者にたいして質問を行い、これまでの質問者が回答者となって、同様に答えに情報をくわえてかえすこともできる。

A : Waktu Anda kecil, Anda tinggal di mana?
B : Saya tinggal di Kamakura. Di hadapan rumah saya ada laut.
A : Anda berenang di sana?
B : Tidak. Saya tidak bisa berenang. Anda suka berenang?
A : Ya. Saya suka berenang. Waktu saya kecil, saya sering berenang di sungai.
B : Oh begitu. Sungai itu ada di mana?
A : Sungai itu ada dekat dari rumah nenek di Oita. Ada air terjun juga di sana.

A : 小さいときどこに住んでいましたか？
B : わたしは鎌倉に住んでいました。 家の前に海がありました。
A : 海で泳ぎましたか？
B : いいえ。わたしは泳げないんです。 あなたは泳ぐのが好きですか。
A : はい。わたしは泳ぐのが好きです。小さいとき川でよく泳ぎました。

B : そうですね。その川はどこにあるのですか。
A : 大分の祖母の家の近くです。滝もありましたよ。

寸劇

コミュニケーションは、言葉だけで行うものではない。声の状態、表情、ジェスチャー、前提となる知識や文脈、お互いの想像力などが総合されてはじめて意味は伝達される。寸劇による演劇空間において体を使って演じることで、コミュニケーションのかたちを身体化することができるのではないかと考えている。

わたしが行う寸劇には3つの種類がある。第一は 会話のセットの応用である。ペアになって会話の状況を想像しながら、他の学生たちの前で演技をしてもらう。用意されたフレーズ通りに行ってもよいが、応用することも可能になる。たとえばパーティの時間と場所にかんする会話ではつぎのような応用がなされたことがある。

A : Pesta hari Jumat jam berapa?
B : Jam 7 kayaknya.
A : Di mana?
B : Di rumah kamu. Jangan lupa!

A : 土曜日のパーティは何時から？
B : たぶん7時だよ。
A : どこで？
B : 君の家でだよ。忘れないでね。

会話のセットを利用する場合は、二人ペアで行うことが多いが、人数の関係などで3人グループができることがある。ここでは紙幅の関係上紹介することができないが、そうした制約をのりこえてさまざまな応用が学生たちによってなされてきた。

第二は、学習した文法事項を使って行うものである。テーマを与える場合と自由な場合とがある。第三は、テーマを与えて行う寸劇である。以下は疑問詞kapan(「いつ」)をつかった寸劇のスク립トの例である。2006年度秋 semester のマレー語・インドネシア語 の学生グループ4人がつくったものである。

A : Kapan ada ujian?	(試験はいつ?)
B : Ujian ada besok.	(試験は明日だよ)
C : Tidak. Lusa.	(違うよ。あさってだよ)
D : Apakah kamu bodoh? Ujian ada tiga hari yang akan datang.	(お前馬鹿か? 試験は三日後だよ)
A : Kamu sudah belajar untuk ujian?	(もう試験のための勉強をした?)
B : Tidak.	(いいえ)
C : Tidak.	(いいえ)
D : Tidak.	(いいえ)
A : Mari kita belajar besok!	(明日いっしょに勉強しよう)
B : OK deh.	(いいよ)

マレー語・インドネシア語教育の実践
A P U方式の確立へむけて

C : OK deh.	(いいよ)
D : Tidak boleh. Ada urusan.	(だめだよ。用事がある)
A : Mari kita belajar lusa!	(あさって勉強しよう)
B : OK deh.	(いいよ)
C : OK deh.	(いいよ)
D : Tidak boleh. Saya harus bekerja.	(だめだよ。仕事をしなくちゃ)
A : Mari kita belajar tiga hari yang akan datang!	(じゃあ三日後に勉強しよう)
B ~ D : Ujian!	(試験だよ)

特別プロジェクト

マレー語・インドネシア語のクラスでは、それぞれのコースにおいて一つずつ、特別なプロジェクトをしている。この特別なプロジェクトはつぎの3においてくわしく説明するが、語学学習をキャンパス内での国際学生たちとの交流や専門教育へと結びつけるところみである。マレー語・インドネシア語では語劇を、マレー語・インドネシア語ではプレゼンテーション(5分)を、マレー語・インドネシア語ではドキュメンタリービデオづくりを、マレー語・インドネシア語ではプレゼンテーション(15分)を行う。

3. 特別なプロジェクト

立命館アジア太平洋大学は、マレーシアやインドネシア出身の国際学生が100名以上いるという特殊な環境を備えている。しかしながらそのような特別な環境が備えられていても、国内の学生と海外からの学生の交流はかぎられているといつてよい。マレー語・インドネシア語を受講しても、それぞれが個人的に意識をしなければ、マレーシア人やインドネシア人と交流する機会はそれほど多くない。そこでわたしがしているところみは、それぞれのコースにおける特別なプロジェクトをとおして受講生たちとマレーシア人やインドネシア人との交流のきっかけを作るというものである。それぞれのプロジェクトは、難度が高いため、キャンパスのマレーシア人やインドネシア人学生の協力をえてはじめてできる。

語劇

マレー語・インドネシア語のコースでは、中間試験と期末試験のあいだの時期に1チーム5人ほどで15分ぐらいの語劇を行う。脚本もすべて自分達の手で用意し、教室内ではあるが、友人や協力してくれたインドネシア人学生などを観客として呼んで上演する。

基本文法の半分も終えないうちにスクリプトを作らなければならないので、受講者の能力だけでの上演は不可能である。このプロジェクトのねらいは自分達の力だけで劇を作るのではなく、キャンパス内のインドネシアやマレーシアからの国際学生の力をできるかぎり借りて劇を作ることであり、文法などの知識がじゅうぶんではない状態でのコミュニケーションの可能性をつかむことである。

語劇は2005年度秋から開始し、2007年度春で3回目を迎えた。第一回目のときは、日本語の台詞をそのままインドネシア語に直訳したものも多く、演劇空間をなかなか生かし切ることができなかった。しかしながら、第二回目以降には、これまでに学んだ会話のフレーズを利用し、動作や場面で台詞を補い、簡潔な言い回しを心がけるなど、効果的な脚本と演出ができるようになってきた。事実、上演後の感想文では、コミュニケーションが言語だけでなく、表情や動作、場面の設定などさまざまな要素から成立していることを実感したということが記述されていた。

これまでに上演された語劇の題名をあげておく。

2005年度秋 「3匹の子豚」 「一休さん」 「白雪姫」 「名探偵コナン」 「さざえさんのショートコント」

「オリジナル劇」

2006年度秋 「タイタニック2006」¹⁰、「シンデレラ」¹¹、「赤ずきんちゃん」¹²、「ドリアンパンマン」¹³、「鶴の恩返し」

2007年度春 「美女と野獣」¹⁴、「さるかに合戦」¹⁵、「白雪姫」¹⁶、「サマン・ガール」¹⁷、「アボカド太郎」¹⁸

プレゼンテーション

マレー語・インドネシア語 では、1人あたりの持ち時間5分のプレゼンテーションを行う。トピックスはインドネシアやマレーシアにかかわることで、これを機会に語学学習だけでなく、地域への関心を深めるきっかけになればと考えている。プレゼンテーションは個人で行っても、グループで行ってもよい¹⁹。グループで行う際は、1人分の持ち時間をグループの人数でかけた時間がグループの持ち時間となる。すなわち3人グループであれば15分の持ち時間がえられる。

2007年度春 semester では、最終のプレゼンにいたるまでにグループによるプレゼンテーションを二度行った。一つのグループは約3人から4人で構成されている。第一回目はインドネシアにかんする解説を行うというものである。インドネシア全般、インドネシアの地理、インドネシアの歴史²⁰、バリ島について、それぞれのグループがA4用紙1枚から2枚の原稿を作成し、プレゼンテーションを行った。第二回目は、キャンパス内でマレーシア人やインドネシア人にたいして簡単なアンケート調査やインタビュー調査を行い、それをもとに原稿を作成してプレゼンテーションを行うというものである。以下のようなテーマで調査がなされた。「インドネシア人国際学生の経済事情」²¹、「インドネシア人国際学生の恋愛事情」²²、「地方語について」²³、「インドネシア人国際学生が好きな日本の有名人」²⁴。最終的なプレゼンテーションは7月19日に行われた。テーマは、これまでの二度のプレゼンテーションを下敷きにしても、まったく新しいものでもよいことになっている。現在、すでに提出されているものは「国語としてのインドネシア語の歴史」²⁵、「バリと観光」²⁶、「東南アジア旅行の経験」²⁷、「ケチャ・ダンスについて」²⁸、「APUのインドネシア人国際学生の経済事情」²⁹、「ハラル・フードについて」³⁰、「APUのインドネシア人国際学生の恋愛事情」³¹などである。

プレゼンテーションの当日は、さまざまなかたちで協力してくれたインドネシア人学生をはじめとしてだれでも教室を訪れることができるようにするため、報告はインドネシア語で行うが、パワーポイントを日本語と英語で作成することになっている。また、議事進行や広報宣伝なども学生たち自らの手で行い、3言語でのチラシづくりなどを行った。

ドキュメンタリービデオ作成

マレー語・インドネシア語 における特別プロジェクトはドキュメンタリービデオの作成である。テーマはインドネシア人学生の日常にかんすることである。この特別プロジェクトは2006年度秋 semester にはじめて行った。あくまでも語学のクラスなので、ビデオの撮影方法や編集のできが問題なのではなく、ビデオを作成するプロセスのなかで、キャンパスの国際学生とどのような交流ができるかが主眼である。

2006年度には、事前に4回ほど、数名のインドネシア人国際学生を教室にまねき、インタビューを行うことで、具体的にどのようなテーマがふさわしいかを探った。そのさい、インタビューの前に2の で示した会話のパターンをとりいれて練習も行った。インタビューを受ける側を演じることで、どのような質問が答えやすいのか、また、自分達がどのような答えを暗黙のうちに想定しているのかなどを実践的に理解するのに役にたったようである。

ビデオづくりは5人ないし6人の二つのチームで行った。一つのチームは国際学生ではなく、インドネシア出身の教員とその家族の日常に焦点を絞った。もう一つのチームは、学内のインドネシア人学生に好きな日本食を尋ねるといった内容であった。どちらもアポイントメントのためのメールや電話など、このプロジェクトのためにさまざまな場面でインドネシア語を駆使し、総合的な力を養ったよ

マレー語・インドネシア語教育の実践
A P U方式の確立へむけて

うである。

プレゼンテーション

マレー語・インドネシア語の開講は2006年度春に実現した。そこでは、一人あたり15分のプレゼンテーションを行った。マレー語・インドネシア語では、みずからの専門教科にかかわりのあることがらをマレー語ないしはインドネシア語でプレゼンテーションすることをめざした。テーマとしてあげられたのは「アジアの発酵食品」「イリアン・ジャヤ」「マレー半島における華人虐殺の歴史」「マレーシアにおける自動車産業」などであった。

4.まとめ

わたしがめざしているのは、文法の習得や教科書中心の外国語学習ではなく、立命館アジア太平洋大学という特別な環境を最大限に利用した新しいかたちの外国語学習のモデルの模索である。第一のねらいはコミュニケーション能力の向上である。言語はたんなる道具ではない。つまり、文法をマスターすれば言葉を自在に使いこなせ、完璧なコミュニケーションができるというものではない。コミュニケーションは、表情、声の調子、ジェスチャー、話者の立場、場所などのさまざまな要件がからみあう関係性のなかで行われており、さらには、そうしたやりとりのなかでそのような関係性が同時に作りあげられるといってもよい。ゆえに、言葉を学ぶことは、たんなる技術の習得ではなく、新しい関係性を構築する鍵を手にするようになるのだ。

第二は、言語学習を専門教科の学習へと有機的に結びつけることである。以前には、マレー語・インドネシア語を受講していながら、クアラルンプールがマレーシアの首都であることを知らない学生や、インドネシア人の多くがムスリムであることを知らない学生が多数見られた。マレー語・インドネシア語のプレゼンテーションなどを手がかりとして、この地域についての基礎的な知識を獲得することをめざしている。さらには、この地域に対する関心をよりいっそう深め、専門教科との連携をはかることをめざしている。

最後に、マレー語・インドネシア語という、ともすればマイナーな言語の学習をすることの重要性を述べて本論を終わらせることとしよう。グローバリゼーションの時代における英語の重要性はゆるぎないものとなっている。たしかに英語さえできれば、世界のどの地域の人とも意思を疎通することはできるだろう。しかしながら、異なる言語の学習は、異なる世界への扉でもある。インドネシアの人々と英語で話すのとインドネシア語で話すのでは相手からの反応はどのように違うのだろうか？インドネシア語を学んだことのない人は、わたしが英語ではなくインドネシア語で何事かを話したその瞬間に構築される関係性をけっして経験することができないのである。歓迎、とまどい、疑心暗鬼、誤解。そこでは、さまざまな関係性がつくられる可能性が開かれている。

グローバリゼーションは均質化とともに差異化をともなって進行している。英語ではなく、マレー語・インドネシア語のような言語を学ぶことは、強いものがより強く、弱いものがより弱くなっていくような状況を攪乱するための一つのきっかけをもたらすのではないだろうか。

付録1 語劇「Alpukat Taro アボガド太郎」スクリプト

<第1幕>

じい：Selamat siang! Apa kabar?

こんにちは。元気？

ばあ：Baik, tapi lapar nih.

元気。でも、お腹すいたよー

じい：Mau makan?

何か食べたい？

ばあ：Ya. Mau makan pisang. Kamu ada pisang?

うん。バナナが食べたい。バナナ持ってる？

じい：Tidak.

ない。

ばあ：Kamu ada apa?

何を持ってるの？

じい：Tidak ada apa apa.

何も持ってない。

ばあ：Mau makan! Mau makan!

食べたい。食べたい。

(少しあけて)

ばあ：Baiklah! Aku pergi ke hutan untuk ambil pisang.

よし！ 私が森にバナナを取りに行くよ。

(じいを指して)

Kamu pergi ke sungai untuk ambil ikan. OK?

おじいは川に魚を取りに行ってるね。いい??

じい：Ok deh...

いいよ。(嫌そうに)

<第2幕>

じい：Haaaaaaaaaaa, Cape cape.

はぁ————、疲れた、疲れた。

Tidak bisa ambil ikan. Nenek akan marah dengan aku...

魚取れないよー。おばあに怒られるよー。

じい：Gimana dong..

どうしよう。

Haaaaaaaaaaaaaaaa.

はぁ————

(おじいが黒い物体を見つける)

じい：Ah, apa itu??

あっ、あれ何？

(黒い物体を拾って)

じい：Unnnnnnnn, apa ini? Apakah ini buah?

マレー語・インドネシア語教育の実践
A P U方式の確立へむけて

う-----ん。これ何？これは果物かな？

(少し迷って)

じい：Ok! Mari kita bawa pulang.

そうだ！家に持って帰ろう。

(黒い物体を運ぶ)

じい：Uuuuuuuuuuu, berat, berat....

う-----、重い、重いよー。

<第3幕>

(おじいが家に帰るシーンで、おばあが家でバナナ食べておじいを待ってる)

じい：Eh, dengar dengar.

ねえー、聞いて、聞いて。

ばあ：Ada apa?

何があったの？

じい：Tadi menemukan sesuatu yang menarik.

さっき、おもしろいものを見つけたんだ。

ばあ：Ehhhhhhhh, beneran?

えー、ほんとに？

じい：Bener, bener. Mau lihat?

ほんと、ほんと。見たい？

ばあ；Mauuuuuuuuu. Cepat, cepat!!

見た-----い。早く、早く。

じい：たら-----ん。(インドネシア語にはそんな表現ないらしいので、日本語で)

ばあ；Apa ini?

これ何？

じい：Tidak tau. Mungkin, aku pikir itu adalah alpukat yang besar.

わからない。多分、大きいアボカドだと思うよ。

ばあ：Yeahhhhh, ayo kita makan!

やったー、食べようよー！

じい：Bagaimana?

どうやって？

ばあ：Tidak tau...

知らない。

(二人で考える)

(おばあがひらめく)

ばあ：Ayo kita potong menggunakan ini.

これで切ろう！

じい：Ok! Berjuang!!

おっけー、頑張って！

(おばあが切る)

(アボカド出てくる)

アボ：Selamat pagi! Mau tidur... Selamat tidur.

おはよう。寝たいよー。おやすみ。

ナレーター：10 tahun kemudian. Dia makan dan tidur tidur terus. Kemudian dia menjadi besar.
10年後。彼女は、よく食べ、よく寝て寝て寝て、大きくなった。

< 第4幕 >

(みんなで、バナナ食べながら話してる)

ばあ：Eh, Sudah dengar? Aku dengar, ada setan di gunung itu.

ねえー、聞いた？ あの山に鬼がいるらしいよ。

じい：Menakutkan.

怖いねえ。

ばあ：(アボカド指して) Hey, tolong bunuh dia.

退治しておいでよ。

じい：Ide bagus!

いいアイデアだね。

アボ：Tidaaaaak. Aku tidak mau pergi sendiri.

え-----、1人で行くのやだよー。

Aku takut. Tidak mauuuuuuu. Ga mau pergi! Ga mau pergi!

怖いよ-----。やだよ-----。行きたくないよー。行きたくないよー。

ばあ：Baiklah, kamu bisa pergi dengan teman kamu.

それじゃ、友達といたらいいじゃん。

アボ：Tidak punya teman!!!!

友達いないもん。

じい：Kasih deh lu.

かわいそう。

ばあ：Di gunung itu, ada banyak hewan. Jadi, kamu bisa mendapatkan mereka untuk menjadi teman!

山にはいっぱい動物がいるから、友達を作ればいいじゃん。

アボ：Tidaaaaak, tidaaaaaaak.

やだ-----、やだ-----。

じい：Baiklah, aku beri kamu ini.

わかったよ。これあげるから。

(バナナ1本渡す)

アボ：Tidaaaaaaak.

いやだ-----。

じい：Kamu mau lagi? Ini dia.

もっと欲しいの？ はい。

(バナナをもう1本あげる)

アボ：Tidaaaaaaak.

やだ-----。

じい：Baiklah, Aku beri kamu semuanya.

わかったよ。これ、全部あげるから。

マレー語・インドネシア語教育の実践
A P U方式の確立へむけて

じい : Ini dia.

はい、どうぞ。

(バナナ 1房あげる)

アボ : Makasih. Aku pergi! Bye!

ありがとう。んじゃ、行くよ。バイバイ。

< 第 5 幕 >

アボ : Ayo pergi! Setan ada di mana?

よーし行くぞ！ 鬼はどこだ？

犬 : Guk-Guk.

ワンワン

アボ : Kamu Setan?

お前が鬼か！

犬 : Bukan, aku anjing. Aku lapar nih. Minta makanan dong.

いいえ。私は犬です。お腹すいた。何かください。

アボ : Maaf lagi tidak ada nih.

ごめん。今、何も持ってないんだ。

(立ち去る際にバナナを食べる)

犬 : Kamu punya Pisang! Kenapa tipu!

持ってるじゃん！ 何で嘘つくの！

アボ : Oh iya ya. Kamu pergi bersama? Ke gunung Setan.

あ、本当だ！ 鬼の山に一緒にくる？

犬 : Ya.

わかった

アボ : Ok, ini dia.

よし、はいこれ。

犬 : Yang benar?

本当？

アボ : Iya bener.

もちろん。

犬 : Ayo!

じゃあ行くよ！

(猿登場)

アボ : Ada Setan! Pikacu, pergi!

鬼だ！ 行けーピカチュウ！

犬 : (無視)

アボ : Pergi! Pikacu!

行けー！ ピカチュウ！

犬 : Saya bukan Pikacu. Saya Anjing. Namanya Jiro.

俺はピカチュウじゃねえ。犬だ！ 名前は次郎です。

サル : Saya bukan Setan. Saya Monyet!

俺は鬼じゃねえ！ 猿だ。

アボ : Maaf, maaf.
おーゴメンゴメン !
犬猿 : Tidak apa apa.
大丈夫だよ。
アボ : Kalau begitu , ayo kita pergi!
じゃあ行くぞ !
サル : Oi! Minta pisangnya dong! Lapar nih!
おい、バナナくれ ! 腹減った。
アボ : Oh iya ya. Kamu pergi bersama? Ke gunung Setan
あ、本当だ ! 鬼の山と一緒にくる ?
サル : Setan apa? Kenapa mesti dibasmi? Mereka kan baik.
鬼って何だよ ? 何で鬼を退治するの ? あいついいやつだよ ?
アボ : Selama masih ada setan di situ, saya akan basmi mereka.
そこに鬼がいる限り、おれは鬼を退治する。
犬猿 : Kenapa?
何で ?
アボ : Kenapa?
何で..... ?
犬猿 : Ok deh... Aayo pergi!
まあいいや、大丈夫 ! 行こう。

< 第6幕 >

鬼 : Selamat siang! Kamu datang ke sini untuk apa?
こんにちは。あなたはここに何をしに来たのですか ?
アボ : Untuk membasmimu!
お前を倒しに来た。
鬼 : Apa katamu?!? Aku tidak akan biarkan!
何だって?? そんなことはさせないぞ !
サル : Aku akan ampun kalau kamu minta maaf.
あなたが謝れば許してあげるよ。
鬼 : Apa katamu?!
何だと ? !
(鬼とサルが相撲する)
サル : Kuat banget ya!
とても強いな !
犬 : Setan ini benar-benar kuat!
この鬼はとても強い !
アボ : Apa boleh buat. Ayo lari !!
仕方が無い。逃げよう ! !
犬 : Lari??
逃げるのですか ?
アボ : Takut! Kamu yang pergi lawan dia lah...

マレー語・インドネシア語教育の実践
A P U方式の確立へむけて

- だって怖いよ。あなたが戦いに行つてよ。
- 犬 : Tidak mau! Kamu yang pergi.
いや、お前が行け！ 俺も怖い。
- サル : Aku punya ide.
俺に考えがあります。
- 犬 & アボ : Apa?
何？
- サル : Ini dia!
これだ。
(本を取り出す)
- 犬 : Apa?
何？ (有り得なさそうな顔でサルを見る)
(アボに向かって)
- 犬 : Apa kamu pikir?
どう思う？
- アボ : Ide bagus!
良いアイディアだ！
- サル : Iya kan?
そうでしょ？
- 犬 : Ehhhhhhhhhh.
え-----。(少し腑に落ちない)
(サルが本を鬼に見せる)
- 鬼 : Aahh.. Jangan-jangan ini adalah...
あ！ これはもしや・・・？
(鬼がサルに気を取られている)
- 犬 : Sekarang!!!
今です!!!
(後ろから、鬼を叩いてやっつける)
(鬼はとりあえず、倒れる)
- アボ : Berhasil!!! Kami sudah membasmi setan!
やった～！ 鬼を倒したぞ！
- 犬 : Rumah setan ini bagus, bukan? Bersih lagi. Pisang juga banyak!
それにしてもこの鬼の家、すごく素敵じゃない？きれいだし。バナナもいっぱいある！
- サル : Benar juga. Mau tinggal di sini?
たしかに。ここに住んでみる？
- アボ : Tapi....
でも.....。
- サル : Rumah jauh banget. Di rumah juga ada nenek bandel, kan?
家に帰るのはすごく遠いし、家にはわがままなおばあさんもいるんだよ？
- アボ : Benar juga.
確かに。
- 犬 : Aa, tapi bagaimana dengan setan ini?

あ、でもこの鬼はどうする？

サル：Setan ini benar-benar suka buku ini ya..

この鬼、さっきの本のことをすごく好きみたいだね。

アボ：Seperti orang saja...

人間みたいだ。

犬：Betul! Kalau begitu, bagaimana kalau kita tinggal bersama?

本当！ だったら、一緒に住むのは？

サル：Mungkin bisa jadi pekerja yang bagus.

良い労働力になるかも！

みんな：Ide bagus tuh!

良いアイデアだ！

みんな：Oi! Setan, bangun! Bangun!

鬼！ 起きろ～起きろ～

鬼：Se.. Selamat Pagi...

お、おはよう・・・

みんな：Pagi!

おはよう

ナレーター：Lalu, kemudian mereka tinggal bersama-sama dengan baik.

そして、みんなで仲良く暮らしましたとさ。

付録2 プレゼンテーション1「インドネシアの歴史」原稿

Sejarah Indonesia

Kami memperkenalkan tentang sejarah Indonesia.

Sebelum abad ke 17, Kerajaan Majapahito menguasai daerah Indonesia sekarang. Pada abad ke 17, kantor Indo -Timur dari Belanda menguasai daerah Indonesia. Sejak abad ke 19 sampai awal abad ke 20, perdagangan berkembang di bawah jajahan Belanda. Indonesia mengekspor, terutamanya, gula, karet dan minyak tanah.

Pada tahun 1942, Indonesia diduduki oleh Jepang. Pada tahun 1945, Jepang kalah, dan Indonesia dijajah Belanda sekali lagi. Tetapi Indonesia memproklamasikan kemerdekaannya. Soekarno menjadi presiden pertama. Pada tahun 1949, Indonesia bukan jajahan Belanda lagi. Indonesia mengaku sebagai negara kemerdekaannya. Pada tahun 1965 Soeharto menjadi presiden kedua.

Pada tahun 1997, krisis moneter terjadi di Asia. Ekonomi Indonesia berkacau-balau. Pada tahun 1998 kerajaan Soeharto jatuh. Pada tahun 1999, Indonesia menjadi negara demokrasi. Wahid menjadi presiden dan Megawati, anak Soekarno menjadi wakil presiden.

Pada tahun 2001, Megawati menjadi presiden. Pada tahun 2004, Yudoyono menjadi presiden.

付録3 キャンパス内の調査に基づくプレゼンテーションの原稿

Orang Indonseia suka siapa?

Kami memeriksa tentang orang Indonesia suka orang Jepang seperti siapa. Karena kami mau tau selera orang Indonesia dan mau disukai orang Indonesia. Semua orang Indonesia cantik, ganteng, menarik dan ramah. Saya mau jadian dengan orang Indonesia!!!

Kalau begitu, saya menerangkan cara pemeriksaan. Mula-mula kita memperlihatkan foto yang tiga orang Jepang pada orang Indonesia. Kami memperlihatkan foto yang Tamaki Hiroshi, Katayama Shojiro dan Enari Kazuki pada perempuan, dan memperlihatkan foto yang UetoAya, Gal-sonne dan Kano-shimai pada laki-laki. Setelah memperlihatkan foto, kami bertanya “ yang mana pria (atau wanita) idaman kamu?”.

Saya menceritakan tentang akibat pertanyaan. Pertama, tentang pertanyaan terhadap perempuan. Sebelum bertanya, kami meramalkan banyak orang perempuan memilih Tamaki Hiroshi. Tetapi akibat yang berbeda. Kami bertanya pada delapan orang perempuan, dan empat orang perempuan memilih Enari Kazuki. Perempuan yang memilih Enari Kazuki mengatakan pintar, seperti anak bagus. Tiga orang perempuan memilih Katayama Shojiro. Sebabnya, dia melupakan lucu dan ramah. Perempuan yang memilih Tamaki Hiroshi adalah seorang saja. Dia pernah menonton “Nodame-kantabire”.

Selanjutnya tentang pertanyaan terhadap laki-laki. Sebelum bertanya, kami meramalkan banyak orang laki-laki memilih Ueto Aya. Akibat dugaan kami tidak keliru. Kami bertanya pada enam orang laki-laki, dan tiga orang laki-laki memilih Ueto Aya. Sebabnya cantik. Dua orang laki-laki memilih Gal-sonne. Dua orang laki-laki yang memilih Gal-sonne mengatakan “Aku suka Gal!!”. Laki-laki yang memilih Kano-shimai adalah seorang saja. Itu Pak. D. Pada awalnya Pak. D memilih Ueto Aya, tetapi tak lama kemudian dia menggemam “Sebenarnya, saya suka Kano-shimai...”.

Dari akibatnya, kalau anda mau disukai orang Indonesia, kami menawarkan laki-laki menjadi seperti Enari Kazuki atau seperti Shojiro, dan perempuan menjadi seperti Ueto Aya. Menjadi gal bagus juga. Kalau anda mau dicintai Pak. D, anda harus menjadi seperti Kano-shimai.

注

1. 1928年に「青年の誓い」において、マレー語をインドネシアの民族のことばとして正式に「インドネシア語」とよぶようになった（舟田1997: 86）。
2. マレー語とインドネシア語の相違については、たとえばSoemitro(1958)を参照のこと。
3. 東京外国語大学の歴史については以下のホームページを参照した。
<http://www.tufs.ac.jp/abouttufs/history03.html>
4. 摂南大学では、2008年度より外国語学部インドネシア・マレー地域にかんする専攻科が設置される予定である。
5. 大阪外国語大学では、地域文化学科と国際文化学科の二学科にわかれるが、いずれも1, 2年次には専攻語を習得する。<http://www.osaka-gaidai.ac.jp/gakubu/faculty.html>
6. インドネシア語技能検定試験のホームページによれば、インドネシア語を履修できる大学は、以下である。
亜細亜大学（全学部）神田外語大学（全学部）九州国際大学（全学部）京都産業大学（外国語学部言語学科）
インドネシア語専修）慶応義塾大学（総合政策学部）国士舘大学（21世紀アジア学部）静岡文化芸術大学（文化政策学部国際文化学科）摂南大学（外国語学部）専修大学（経済学部、経営学部、商学部、文学部、ネットワ

ーク情報学部)大東文化大学(国際関係学部)拓殖大学(商学部、政経学部、国際学部)中央大学(総合政策学部)中京女子大学(人文学部アジア学科)天理大学(国際文化学部アジア学科インドネシア語コース)東京外国語大学(外国語学部東南アジア課程インドネシア語専攻)日本大学(国際関係学部)立命館アジア太平洋大学(アジア太平洋学部、アジア太平洋マネジメント学部)

<http://www.i-kentei.com/universitas/universitas2.html>

7. このような文法の分類はポピュラーなものではなく、立命館アジア太平洋大学のカリキュラムと受講生の特色にあわせた結果である。アジア太平洋言語の科目は基本的には日本語で開講されているので、英語基準の学生が受講することはまれである。しかしながら、各クラスに一名は日本以外の国の出身者や日本語を母語としない学生が受講している。そこで、文法の分類なども英語との比較がしやすいような工夫をしている。
8. マレー語・インドネシア語の文法においては、厳密な意味での助動詞というのは存在しないが、専門ではない学部学生の理解を容易にするために便宜的に助動詞という言い方をしている。の受動態にかんしても同様に、厳密な意味ではマレー語・インドネシア語には受動態という表現はないが、便宜上そのような用語を使用している。
9. 以下のURLにおいて動画が公開されている。<http://www.youtube.com/watch?v=N7y8rzVXat0>
10. 以下のURLにおいて動画が公開されている。<http://www.youtube.com/watch?v=pq1yfuTBIjI>
11. 付録1のスクリプトを参照のこと。
12. 2006年度の春 semester においてはじめて行ったときには、グループはなく個人のみで行った。
13. 付録2のSejarah Indonesiaを参照のこと。
14. 付録3のOrang Indonesia Suka Siapa?を参照のこと。

参考文献

- 石井由香(1992)「言語・教育問題とエスニック集団 途上国マレーシアの経験」梶田孝道編『国際社会学』(名古屋大学出版会)
- 舟田京子(1997)「インドネシアの言語と文化」小野沢純編著『ASEANの言語と文化』(高文堂出版)
- Ismail Foussein (1984). Sejarah Pertumbuhan Bahasa Kebangsaan Kita. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka
- 森山幹弘・柏村彰夫(2003)『教科書インドネシア語』(めこん)
- 小野沢純(1997)「マレーシアの言語と文化」小野沢純編著『ASEANの言語と文化』(高文堂出版)
- Soemitro, B. I. (1958). Bahasa Indonesia dan Bahasa Melayu. In Dewan Bahasa dan Pustaka Vol. 2, No. 6 (June)